結婚・・・一番大切なことは？

二〇一〇年二月二十日　生涯学習センターに辣腕テレビプロデューサーとして著名な栗原美和子さんによる「私小説『太郎が恋をする頃までには…』」～執筆と出版の舞台裏～と題した人権・同和問題講演会を実施いたしました。

多くの共感と感動、そして、感謝のアンケートが寄せられた中の一部をご紹介します。

○　自分も同和地区出身の方と結婚し、現在同和地区で生活している。地区外から来た立場の人間です。私の場合、親戚からの反対にあい、夫と二人いろいろ悩み苦しみながら、同じように最後は夫のことを認めてもらうことができました。共感することだらけで涙が止まりませんでした。

○　私も同じ立場に立った者です。私も両親に言えませんでした。でも、私の子に何かあったらどうする、どうしていけばいいの？で運動の中にはいって運動をしていますが、まだまだです。私も前を向いて子育てをしていきたいと思いました。

○　このような講演はもっとするべきだと私は思います。自分自身、差別を受けた身ですが、分かりあえる人の話を聞くことも大切だと思いますし、勇気を出して言える人の話もとても大切だと思います。

「部落差別はない」あるいは、「あってはならない」との声とは裏腹に、現実には同和問題にかかわる結婚差別が今日においても悲しいかな存在し、自分らしく生きていくことが阻まれている姿をアンケートから読み取ることができます。と同時に、声すらあげられず部落差別による苦悩の中に暮らしておられる方々もおられるであろうことも想像に難くありません。このことに、栗原美和子さんのお話から気づかれた方がおられます。

○　私は、同和問題には全くかかわる事がありませんでした。身近にも子どものころから、何も知らずに育ってきました。道徳の時間で聞くことがあるくらいでした。栗原さんの話を聞いて、まだ、本当の意味で理解できないと思いますが、もっと、知るべきだ、聞くべきだと思いました。

○　同和問題、被差別部落の問題は、くり返し語られ、正直「またか」という気持ちがどこかにあったと思います。「こうやって言いたてるから、知らない人もそのことを知ってしまう。」「知らないままにしておけば、差別はなくなるんじゃないか」と。けれども、それではいけなかった。「知らないことにしておけば、なかったことになる」訳ではないと、今、現在、リアルタイムで、こんなに苦しんでいる人がいる。差別意識にあふれた人がいるという現実に、ひどく驚きました。私たちの子どもの世代には絶対に受けついではいけない感覚、意識です。

栗原　美和子さん（2010/02/20　筑紫野市人権･同和問題講演会にて

○　こんなにつらい思いをしている人がいるのかと、今までの自分が申し訳なく思えます。自分は差別なんかしていないと思っていましたが、真剣に考えた事がなかっただけなのですね。これからも応援します。頑張ってください。

そして、多くの方は・・・

○　栗原さんの生き方に熱くなりました。感謝します。私の生き方を問うことに努めたいと思います。
考える機会を与えていただいたこと感謝しています。

○　栗原さんの生き方や考え方に共感しました。自分が正しいと思うことは、いつか必ず周りの人に分かってもらえる時が来ると信じて、生きていこうと勇気が出てきました。

「差別はなくならない」という方がおられますが、人権・同和問題の解決に取り組む人たちに共通する考え方があるとすれば、「人間をとことん信じつづけている」ということなのかも知れません。「結婚」というものが人と人がつながっていくひとつの「かたち」であるならば、どのような困難の中にあっても「まるごとうけとめ」「信じあうこと」が大切なことだと言えるかもしれません。

日本国憲法第24条
婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。